

幼児と異分析——通時と共時

高松節子

キーワード：幼児、異分析、通時と共時

- 1 はじめに
- 2 通時的異分析
- 3 共時的異分析
- 4 結び

1 はじめに

1982年に、アメリカのある大学の修士課程で児童の読書指導のコースをとっていたとき、いくつか読むことになっていた本の中の一冊に、Fred Gwynneの *The Sixteen Hand Horse* (1980) がある。両親が、「皮がめくれる鐘」や、「走る鼻」について話しているのを一人の幼い女の子が聞いていて、その様子を絵に描いたものである。

最初の頁は、人間の手が大小16本巧みに重なり合って一頭の馬の形になり、その背には主人公の少女が乗馬姿でこちらをみている。そして、横に書いてある次の文章から、この本の題名がでたことがわかる。

Mommy says that she wants a horse that is sixteen hands. (ママが言うには16本の手のお馬が欲しいんだって)

馬の高さを計るとき、手幅尺、ハンド(4インチ)を使うが、この馬の背丈は16ハンド(64インチ)ということになる。この女の子は、聞こえたとおり、16本の手と馬を結びつけて頭に描いている。また、別の頁には、女の子が目

を丸くして物かげからのぞいて見ている前を人間の足がついた鼻が走っている絵があり、横に、

Mommy says her nose is running. (ママが言うにはママのお鼻は走っているってさ)

とある。同じように、両親の話しをこの女の子がどのように聞いているか以下にいくつかの例をあげてみる。なお、訳は描かれている絵を参考に行っている。

Mommy says that churches have cannons and bells that peel. (教会には大砲や、皮がめくれる鐘があるってママが言っている) [canons (正典)、peal ((鐘が) 鳴りひびく) を聞き誤っている]

Daddy knows a man who fought a suit and lost. (パパは、スーツと戦って負けた人を知っているんですって) [訴訟がスーツに]

Mommy says she and Daddy went to the opera and were moved by the orchestra. (ママとパパはオペラに行ったとき、オーケストラに運ばれちゃったって、ママが言うの) [moved by ~ (感動する) が、運ばれるに]

And sat in a tear. (そして、涙の中にすわったんですって) [in tears (涙をうかべて) の聞き誤り]

Daddy says his car has a crack in its block. (パパが、パパの車は積み木にひびが入っているって言うの) [【機械】(シリンダー) ブロックを積み木に]

It says on the radio to watch out for a rabbit dog. (ラジオで、うさぎ犬に注

意するように言っている) [rabid dog (狂犬) から rabbit dog (うさぎの顔をした犬) を想像している]

Daddy says there are locks big enough to hold a battleship. (パパが言っているけど、戦艦を留められるぐらい大きなかぎ(錠前)があるんですって) [安全装置が、かぎに]

Daddy says he won't join the tennis club, because all the members are wasps. (パパは、テニスクラブには入らないんですって、だってクラブのメンバーは、みんなスズメバチばかりだからって言うの) [WASP (White Anglo-Saxon Protestant) (アングロサクソン系白人新教徒) がスズメバチに]

Mommy asked the grocer to see his fish row. (お店のおじさんに、おじさんとおこのお魚は、ボートを漕ぐのって、ママがたずねたの) [raw (生の) が row に]

Daddy says he won't play cards if the steaks are too high. (ステーキの高さがあんまり高いのなら、パパはトランプはしないって言っている) [stakes (掛け金) がステーキに]

Daddy says a hunting dog can flush a pheasant. (狩に使う犬は、きじをトイレのお水で流すことができるんだってパパが言っているの) [flush (【狩猟】 <鳥を>飛び立たせる) が (水を流す) という方の意味に]

この本を使って、アメリカの子供達には、同音異義語を教えたり、熟語を学ばせることができよう。あるいは、間違いを見付けさせ、それを訂正させるという指導をするとき、よい教材として使うことができる。しかし、担当教授のコルヴィン先生によってこの本が紹介されたとき、頁がめくられる毎

に、教室中にドッと笑い声起きた。当時は、異分析ということばも知らなかったが、このことは、いつまでも頭に残った。

2 通時的異分析

語や語群は、新しい世代によって、前の世代が分析したのとは異なって分析されることがある。どの言語にもみられるこの現象を説明するのに、Jespersen は *metanalysis* (異分析) という用語を造った。この説明は、*A Modern English Grammar on Historical Principles Part II* (1909-49)、および *Language: Its Nature, Development, and Origin* (1922) の中に述べられているが、この現象の具体的説明に Jespersen は、子供の言語習得過程における聞き誤りを指摘している。こどもは、大人が話すのを聞いていて、語と語の切れ目がどこであるか、あるいは、語幹や語尾に何がつくのかといったことを、悟らなければならないが、ときどき、間違ったところで、ことばを区切ってしまうことがあり、この新しい分析が一般化してしまうのであろうと述べている。

子供が大人の話していることばを聞き誤るということは、この Gwynne (1980) の絵本からもわかるし、また、身近な子供達の間にもよくみられることである。けれども、子供の聞き誤りは、おおかたは、おとなによって矯正される。例えば、アメリカの子供たちは、「ケンカしてきた」というとき、*fighted* といっちは、*fought* と直される。英語の動詞の強変化活用がなくなっていき、新しい語は弱変化（規則活用）を適用している流れの中で、大人が子供の誤りを直すことによって、強変化を留めている一例である。もし、こうした誤りの一つが、そのまま残っていったならば、それは、Jespersen のいう通時的な異分析ということになるろう。

Jespersen の異分析の語は、次のようなものがある。

語頭の *n-* がとれたものでは、中期英語の *a naddre* が *an adder* (まむし) に、*a napron* が *an apron* (エプロン) に、*a nauger* が *an auger* (錐) になった。逆に、不定冠詞 *an* の *-n* が語頭について、*an ewte* が *a newt* (いもり) になった。

その他に、North Thriding、West Thriding、East Thriding の th- を前の語の一部と誤って異分析した結果の Riding (ライディング：イングランド旧ヨークシャー州の行政区画の名称) や、surround (とり囲む、とり囲むもの) のように、sur + ound からできた語を、あたかも round からできた語であるように異分析したため、意味が変わってしまった例がある。

数に関する異分析を、Jespersen は、Numerical Metanalysis (数の異分析) と呼んで、200語余りの例を挙げている。これは、語尾の -s に関したものが最も多く、本来単数形である語を異分析して複数形と考えたもの、逆に、本来複数形である語を異分析して単数形と考えたものの、二つの種類がある。

本来単数形である語を異分析して複数形と考えたものには、語幹の一部である -s を複数形の語尾の -s と誤った例として、alms (施し物) [古期英語の形は *ælmysse*]、riches (富) [古期英語の形は *richesse*] などがある。また、本来語幹の一部である -s を複数語尾の -s と誤ったため、-s を取り去って、新しい単数形をつくった逆成語では、pea (えんどう豆) [中期英語の形は、*pease, peas*]、cherry (サクランボ) [中期英語の形は、*cherris*]、asset (資産) [中期英語の形は、*assets*] などの他に、俗語の *Chinee* (中国人)、*Portuguee* (ポルトガル人) などがある。

逆に、本来複数形である語が、単数形と考えられたものは、次のような語である。*Bodice* (婦人服前後身ごろ) [body の複数形]、*invoice* (送り状)、人の呼び名の *buttons* (ボーイ)、*sly-boots* (いたずら者)、道具の *scissors* (ハサミ)、*pincers* (ペンチ)、*tweezers* (毛抜き)、場所・建物・地名の *gardens* (遊園地)、*hustings* (選挙場)、*barracks* (兵舎)、*works* (工場)、*Athens* (アテネ)、病名の *measles* (はしか)、*pox* (痘(症)) [単数形は *pock*]、*ricketts* (くる病)、人間の行為・期間・学問名の *holidays* (休暇)、*linguistics* (言語学)、*physics* (物理学)、*politics* (政治学)、*thanks* (謝意)、その他に、*bitters* (苦味酒)、*means* (手段)、*pains* (骨折り)、*news* (ニュース)。

複数語尾の -(e)n を語幹の一部と誤解して、単数形と覚えてしまったものは、*chicken* (ニワトリ)、*ramson* (ラムソン 《ユリ科ネギ属の広葉のニンニ

ク)) などがある。

異分析は、前の世代とは異なった語や語群を分析することであるから、そのために、前後の語にいくらかの影響を与えることになる。たとえば、数の異分析は、複数形を単数形と考えたり、単数形を複数形と考えたりするために、主語と述語動詞の一致に影響する。単に語や語群に変化があったということではなく、そのことと、そのことによって、前後に影響するこの現象を、Jespersen は、異分析と呼んだと解釈すればよいのであろう。また、*a naddre*→*an adder*, *a nauger*→*an auger* などの例からもわかるように、異分析は、語の音の変化であり、*surround* のように、意味の変化でもある。

Jespersen は、子供の聞き誤りが、語の変化の要因になるから通時的異分析であるといっているのであって、子供が誤って異分析をしても、固定しなくては Jespersen の研究の対象にはならなかった。では、子供の聞き誤りはどういうとき、固定するのであろうか。次の説 (Jespersen, 1922) は興味深い。

「ある言語の変化がある時期に、他の時期より速く進むことがあるが、それは激しい、拡張された戦争があるとき、多くの男が家を離れて外地に行き、そこに定住したり、あるいは死んでしまい、残された女が畑仕事などをやらねばならず、家庭がおろそかになり、その結果として子供たちは放任され、従って子供たちの話しことばの誤りがふだんのときのように矯正してもらえないという事実によるものである」

上の説は、Jespersen が言語の変化が他の時期と比較して著しく大きい時期についてその原因として支持している説である。Jespersen は、上の説に加えて二つ目の原因に、社会全体が独立の意思に燃えている時期をあげている。この説は、子供の聞き誤りが固定する原因として、前の説ほど、直接結びつくものではないが、いずれにしても、このような平和ではない社会的背景が子供の聞き誤りが固定する原因として考えられる。

まず、音と子供の聞き誤りについて考えてみたい。似ている音は混同され

やすい。英語を母国語とする子供たちは、soldier（兵隊）と shoulder（肩）、hassock（（祈りの時に用いる）ひざ蒲団）と cassock（司祭平服）、diary（日記）と dairy（乳製品）の区別がつくまで苦勞するといわれる。また、ある女性の記録に、子供が purgatory（浄罪）を Portugal と言ったり、Cain and Mabel と言ったりする例がある。これは、子供が自分の知らないことばを聞いたとき、自分のよく知っていることばにしてしまうということを示している、Jespersen は説明している。先の Gwynne（1980）の中に出てくる、rabbit dog（rabid dog）や cannons（canons）などほとんどの聞き誤りは、同様の例である。少し年の離れた子供同士が、次のような会話をしているのを聞いたことがある。——「参加賞をもらった」「二ヶ所？四ヶ所？」「も一つ」、「新体操が中心だって」「えっ中止なの」——これも年少の4才児が上の子をからかっているわけではない。とっさに、自分の知っている語に置き換えて応答しているのである。また、ある学者は以前、too（とっても）ということばを聞いたことがあるインドの少年が、さらに程度を上げた表現をしようとして、“It’s three hot in this room.” と言ったことを記録している。この子供にとっては、too が、two であったわけである。

通時的異分析に直接結びつく聞き誤りは、語の切れ目の誤りである。Jespersen は、‘Not at all’ が ‘not a tall’ と聞こえる例をあげて、子どもの側にすれば、一語であるか、二語であるいは三語であるかを聞き分けるために、多くの比較や分析が必要であると指摘している。そのあげく、子供は間違ったところに切れ目をつけてしまうであろうということであった。その聞き誤りが一般化したならば、それは通時的な異分析になる。S.L. という子供は、いつも ‘banana’ を ‘abanana’ と言ったという記録を Jespersen が載せている。これは、“Will you have a banana?” と聞かれたとき聞き誤ったらしく、以来この子は、“May I have an abanana?” というふうに使っていたということである。子供がよく apple を an-apple の異分析から napple と言い、逆に、enormous（非常に大きい）を normous と言う例がある。

次に意味と子供の聞き誤りを考えてみたい。Gwynne（1980）の中に同音意

義語が多いことからわかるように、そもそも、音と意味を分けて考えることはできないのであるが、ここで分けたのは、a nadder から an adder へと異分析して音が変化した例と、surround を sur + ound から、sur + round と異分析したために意味が変化した例を分けて考えてみようと思ったからである。

4才3ヶ月になる子が、“Your eyes are running”（お目々がキョロキョロよく動くこと）といわれて、びっくりして、“Are they running away?”（お目々が、駆けて逃げていっちゃうの？）と聞き返した記録を、Jespersen は示しているが、これは、Gwynne（1980）の nose running と同じ誤りの例である。子供の聞き誤りは、おおかた大人によって矯正されると述べたが、子供同士によっても矯正されるし、あるいは、誤った子自身によって矯正されることも考えなければならないであろう。running nose などは、子供が最初に聞いたときはびっくりするだろうが、それだけに、すぐその場で大人にたずねることが多いのではないだろうか。こうしたことによって、熟語が残されていくのかもしれない。

矯正する側の大人が意味の変化に影響を与える場合もあろう。幼い子に右と左を教え込むのに苦勞する時期があるが、子供に右手を使うことを強いるのは日本ばかりではない。子供がいつまでも覚えられないとき、‘No, the right hand’（違いますよ、正しい方の手を使いなさい）と言った方が子供にわかりやすいと考えて、親がこう言っているうちに「正しい」という意味の語が、「右」を表すようになったということを Jespersen は英語のほかにドイツ語、フランス語、スペイン語、スウェーデン語などの例をあげて説明している。この例の right は通時的異分析と考えてもよい。

大人が子供の誤りを矯正したり、あるいは子供にたずねられたことばを説明するのは、そのことばが使われているその状況における意味（のみ）を説明している場合が多いと思われる。一つの語に多くの意味があり、それらは少しずつ異なっていたり、また同音異義語のように、極端に違う意味を一つのことばが持っていたりする。ことばの意味はその場の状況から察したり、文脈から推定されるものであろう。アメリカでは、子供たちの読解力のレベ

ルを調べるのに I R I (Informal Reading Inventory) が一般に用いられている。すべての読み間違いを数えあげるこの調査に対し、間違いをそれぞれ検討し、読解力に関係のある誤りと、そうでないものを分けて調べる方法が Miscue Analysis である。Miscue Analysis は、Kenneth Goodman の用語で、読むこと (reading) は、psycholinguistic guessing game (心理言語学的解き当て遊び) であるという理論 (1967) (Harris & Sipay, 1980) に基づいている。子供が読み間違っても、それが同じような意味のことばに置きかえられたのであれば、読解力の低さが心配される誤りとはみなさない。そのことばを知らなかったわけではないのだから問題にしないのである。

子供がことばの聞き誤りをする場合、そのことばを知らないということであり、ことばの聞き誤りは、ことばを知らない大人によってもおこりうる。語の変化は子供によるものであるか、それとも大人によるものであるかといった分け方はできなくなる。実は、Jespersen も異分析のいくつかの例をあげるならば、ここでは、ことばに最初に出会った者の年齢はあまり重要ではないと述べているのである。Jespersen によると、a pease, a cherris というかわりに、a pea, a cherry といった形を最初に使った者は、幼い子であったことは充分ありうることであるが、a Chinee, a Portugee の場合は、必ずしも子供の語であったとはいえない。Chinese, Portuguese を単数として以前使ったがある者は、a Chinee, a Portugee といった形は使わないであろうが、最初に Chinese, Portuguese が Chinee, Portugee に複数語尾の -s をつけた複数形として理解された場合にこれらの異分析がなされたということは確実で、他の全ての例についても、こうしたことが言えると述べている。

異分析の説明では子供の聞き誤りをその要因として指摘しているだけに、上の見解は見落とされてはならない重要なことである。

3 共時的異分析

幼いころ「渡し舟は、ワタシだから女の舟でしょ」と言ったことを、いつ

までも親から聞かされる。いつ矯正されたか、いつごろから渡し舟の意味を正しく理解するようになったかまったく記憶にないが、「渡し舟は、ワタシだから女の舟」という異分析にあるヒューマーを、親はいつまでも思い出して楽しんでいるのである。

子供はことばを習得する過程で、ひんぱんに無意識に異分析をしている。また子供に限らず大人によってもことばの聞き誤りがなされることがある。おおかたは矯正されてしまうが、わずかに、固定したものを私達は通時的異分析と呼んだ。

ところが、人は幼児の聞き誤りを楽しんだり、また意図的にことばを異分析する。これは歴史的なことばの変化につながるものではないが、ことばを遊ぶ感覚であると指摘し、異分析に共時的な意味づけをしたのが、郡司利男の異分析論（「異分析」——意味の創造——、『アダムのへそ』p.56, 1984）である。

郡司（1984）は、「現実よりもことばの方が操作しやすい」という事実を指摘している。

たとえば、a cat without a grin（ニヤリともしないネコ）という表現と、その表現の向こう側とを想定するとして、表現のほうは a grin without a cat（ネコともしないニヤリ）という配列を造作なくつくれるが、表現の向こう側というか、現実の世界はそう簡単には配列がえがけるものではない。（p.58）

また、ことばの仕組みと実体の仕組みは平行していないということを指摘し、英語の仕組みから造り出された次のなぞをあげて説明している。

Which has more legs, a cow or no cow? — Well, no cow has eight legs, and that is more than most cows have.

No cow has eight legs. という文は、「脚の8本ある牛はいない」と理解されるが、英語の文の仕組みから、「no cow には8本の脚がある」といったふうにも解しうる。上のなぞの場合のように、「脚の8本ある牛はいない」と解するのと区別して、「no cow には8本の脚がある」と解することや、a grin without a cat も異分析と呼んでいる。

Jespersen は、ことばの変化とそれに伴う影響を含む現象を異分析と呼んだが、郡司（1984）は、現実の世界では起こりえない状況を意図してことばを操作することによって作りあげたことを異分析と呼んでいる。

さらに、異分析という作用を拡大解釈して、「ことばの非レットル用法」であると定義することにより、諺をことばの大きな単位としてとらえたパロディやもじり、1つのことばを2つのレットルに用いることになる pun, (What did the mayonnaise say to the refrigerator? — “Close the door. I’m dressing.”) といったなぞに用いられる定まり文句を意外な文脈に入れるウェラリズム、breakfast と lunch から brunch をつくる混成語、借用語による混成語〔英語の gentleman、日本語の「タフな」、そしてマカロニ語なども異分析であると述べている。(p.74) 郡司（1984）の論じているのは共時的な異分析で、しゃれやヒューマーに不可欠のものである。(p.62)

共時的な異分析は、ことばを遊ぶ感覚であるが、ことば遊びとは、ことばを思うままに操作するということであって、笑い話にかぎったことではない。乃木将軍が休職中農人として生活した那須野で詠った歌に、

世の中になすべきこともおほかるにこんなところでなにを那須のか

なすこともなくて那須野に住む我はなす唐茄子を喰うて尻をこく

がある。

絶対的な立場から、心の持ちようを一転する方向が表現による異分析である。ヒューマーの構図を言語学的に解明すれば場の脈絡の異分析(郡司、1978)

ということになる。

4 結び

郡司の異分析論は、Jespersen の数の異分析は無視して、子供の聞き誤りだけをとりあげている。郡司が論じているのは Jespersen が指摘した、自覚されることのない子供の誤りではなく、大人による共時的な異分析である。Gwynne の絵本の場合でも、Daddy says..., Mommy says..., という形をとってはいるが、大人による共時的な異分析であるといえる。幼児期の異分析は、おおかたは残らないが、この残らない異分析は共時的な異分析である。

Do you know how long cows should be milked? (雌牛って、どのくらいの時間ミルクをしぼれるか知ってる?)

— The same as short ones. ((ノッポの牛は、どうやってミルクをしぼるのかって?) ちっちゃい牛と同じさ。)

次の笑い話は、上の例のように幼児が聞き誤っているととれるし、ひっかけにのらなかった賢い子の答えともうけとれる。

If a butcher was six feet tall and wore size twelve shoes, what would he weigh?

— Meat, stupid.

幼児期における異分析は、多くは意識されない共時的な異分析といってよい。Gwynne の絵本の女の子の聞き誤りを幼児期に体験しても、していなくても、少し成長した子供たちがこの絵本を読んで楽しむことができる。

アメリカの子供たちは、‘ice cream’ と誰かが言えば、すかさず、‘You scream,

We scream' と、からかう。これなどは子供による意識した異分析である。

私達が、ここで共時的異分析と呼んだ意図的、あるいは意識されない異分析もまた、大人によっても子供によってもなされている。

参考文献

- Fries, C.C. *American English Grammar*. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1940.
- 福原麟太郎編. 『英語教育事典』(研究社)、1961.
- 郡司利男. 『アダムのへそ』(桐原書店)、1984.
- 郡司利男. 『三等学部長』(こびあん書房)、1978.
- Gwynne, Fred. *The Sixteen Hand Horse*. Illustrated by Gwynne, Fred. New York: Wind mill Books Inc. and Wanderer Books, 1980.
- Harris, Albert J. & Sipay, Edward R. *How to Increase Reading Ability*. Seventh ed. First ed. 1940. New York: Longman, 1980.
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Part I, II, VI. London: George Allen & Union Ltd., 1909-49.
- Jespersen, Otto. *Language: Its Nature, Development, and Origin*. London: George Allen & Union Ltd., 1922.
- 大濱徹也. 『乃木希典』(河出書房)、1988.
- Weekly, Ernest. *The Romance of Words*. First ed. 1912. London: John Murray, 1961.
- 安井稔. 『英文法総覧』(開拓社)、1984.

Summary

The Child's Metanalysis——Diachronic and Synchronic

Setsuko Takamatsu

The Sixteen Hand Horse (Gwynne,1980) is the picture book for the youngest which depicts a little girl's visual images of her parents' talking about such things as bells that peel and a running nose. This book might be used to teach children homonyms, idioms, and also corrections and errors. At the same time, not only the youngest but also adults can enjoy its humour. At the time when this book was introduced in our Reading class of Master of Education in certain University in U.S.A. in 1982, I could not imagine that it would be a cue to the study of metanalysis.

Jespersen coined the word 'metanalysis' for the phenomenon frequent in all languages that words or word-groups are by a new generation analyzed differently from the analysis of a former age. He pointed out that the child's mishearing caused metanalysis. In most cases, themselves or adults correct children's mishearings. Only a few mishearings might become general. We call this phenomenon 'diachronic metanalysis'.

Gunshi's theory of metanalysis is significant because he pointed out that we intentionally do analyze the words or word-group differently. He insists that we can find metanalysis in almost every expression of humour. He is illustrating chiefly about the adult's intentional metanalysis. We call it 'synchronic metanalysis'.